

50年間で大学数・学生数とも倍増！ 女子占有率も上昇続く

旺文社 教育情報センター 2020年11月2日

国立大の法人統合や私立大・短大の統合再編など、大学の教育・研究環境をめぐる動きが加速している。こうした中、この50年間で学生数、大学数が2倍となっていることがわかった。ここでは、『令和2年度学校基本調査速報』等を資料として、大学・短大に関わる諸データを紹介する。

* 以下、「学生数」には学部学生のほか大学院学生、専攻科・別科の学生及び科目等履修生・聴講生・研究生等を含め、「短大生数」については本科学生のほか専攻科・別科の学生及び科目等履修生・聴講生・研究生等を含める。また、「学校数」は学生募集停止の大学も含める。なお、データは2020年度のみ「学校基本調査速報」、それ以前は「学校基本調査」によるもの。2020年度の速報は「卒業後の進路」が未公表のため進学率等は未算出。

大学・短大の学生数・学校数の推移

◆2020年度の大学全体の学生数は3千人減少

2020年度の大学の学生数は前年度より3千人減の291万6千人で6年ぶりの減少となった。学部学生数は増加し、大学院学生数も前年とほぼ同数であったが、科目等履修生・聴講生・研究生などが前年より1万6千人も減少したことが大きく影響した。

●大学・短大学生数(男女別)&女子占有率の推移

年 度	大学学生数(人)				短大学生数(人)			
	計	男	女	女子占有率(%)	計	男	女	女子占有率(%)
2000年	2,740,023	1,747,711	992,312	36.2	327,680	33,990	293,690	89.6
2001年	2,765,705	1,739,307	1,026,398	37.1	289,198	31,091	258,107	89.2
2002年	2,786,032	1,726,088	1,059,944	38.0	267,086	30,057	237,029	88.7
2003年	2,803,980	1,716,549	1,087,431	38.8	250,062	29,972	220,090	88.0
2004年	2,809,295	1,708,456	1,100,839	39.2	233,754	29,291	204,463	87.5
2005年	2,865,051	1,740,151	1,124,900	39.3	219,355	28,224	191,131	87.1
2006年	2,859,212	1,731,738	1,127,474	39.4	202,254	25,092	177,162	87.6
2007年	2,828,708	1,701,957	1,126,751	39.8	186,667	21,757	164,910	88.3
2008年	2,836,127	1,695,372	1,140,755	40.2	172,726	19,208	153,518	88.9
2009年	2,845,908	1,687,518	1,158,390	40.7	160,976	17,478	143,498	89.1
2010年	2,887,414	1,701,834	1,185,580	41.1	155,273	17,482	137,791	88.7
2011年	2,893,489	1,693,307	1,200,182	41.5	150,007	17,372	132,635	88.4
2012年	2,876,134	1,670,000	1,206,134	41.9	141,970	16,501	125,469	88.4
2013年	2,868,872	1,652,860	1,216,012	42.4	138,260	16,084	122,176	88.4
2014年	2,855,529	1,635,438	1,220,091	42.7	136,534	15,812	120,722	88.4
2015年	2,860,210	1,628,342	1,231,868	43.1	132,681	15,220	117,461	88.5
2016年	2,873,624	1,625,898	1,247,726	43.4	128,460	14,485	113,975	88.7
2017年	2,890,880	1,626,987	1,263,893	43.7	123,949	14,051	109,898	88.7
2018年	2,909,159	1,628,753	1,280,406	44.0	119,035	13,505	105,530	88.7
2019年	2,918,668	1,625,573	1,293,095	44.3	113,013	13,147	99,866	88.4
2020年	2,916,078	1,621,582	1,294,496	44.4	107,634	12,963	94,671	88.0

(注) 大学学生数には大学院等を、短大学生数には別科・専攻科等をそれぞれ含む。

学生数を設置者別にみると、国立大が59万9千人（全体の20.5%）、公立大が15万8千人（5.4%）、私立大が215万9千人（74.0%）で、私立大が全体の3/4を占める。

一方、短大の学生数は前年度より5千人減の10万8千人。10万人割れが目前で、短大数の減少とともに学生数の減少傾向が続く。設置者別の短大生数は、公立短大が6千人（5.2%）、私立短大が10万2千人（94.8%）となっている。

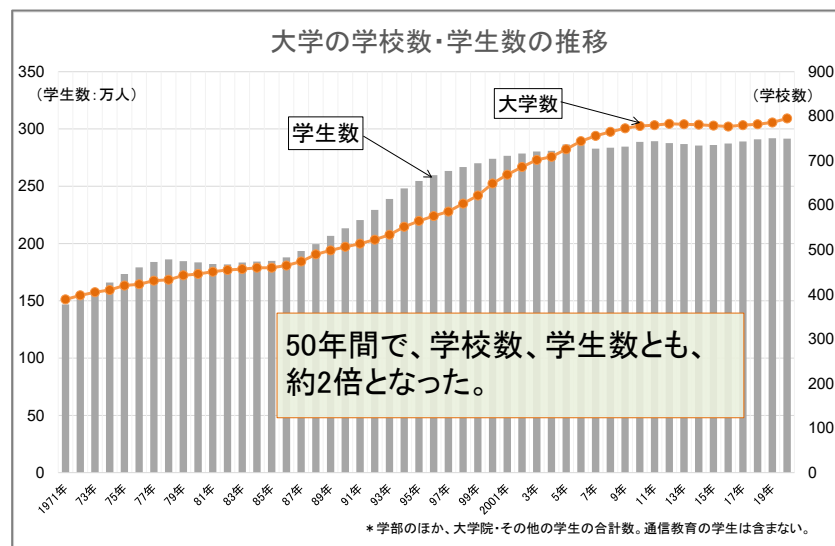
なお、大学の「学部学生数」の現状はこちらを参照してほしい。

http://eic.obunsha.co.jp/pdf/educational_info/2020/0923_1.pdf

◆学生数・学校数の推移：50年間で倍増

大学の学生数は、1971年度の146万9千人から2020年度の291万6千人と、144万8千人増加し、50年間で約2倍（198.6%）となった。設置者別では、国立大学生が28万3千人（189.3%）、公立大学生が10万9千人（320.8%）、私立大学生が105万6千人（195.8%）とそれぞれ増加した。

学校数も増加を続けており、1971年度の389校から2020年度の795校となり、こちらも約2倍（204.4%）となっている。設置者別では、国立大が11校、公立大が61校、私立大が334校の増加である。さらに2019年度から誕生した専門職大・短大（公私立

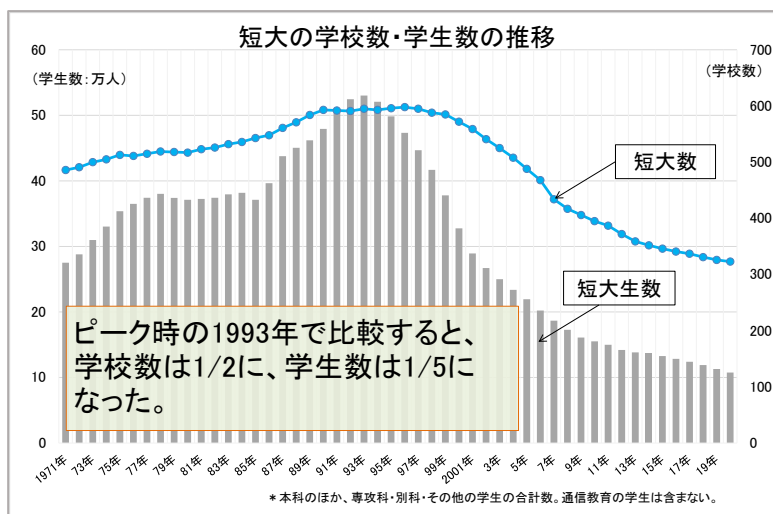


で11校が開設）も今後増える予定がある。

国立大は2002年度から2007年度に全国各地で総合大学と医科系大学などの統合（山梨大と山梨医科大、神戸大と神戸商船大、九州大と九州芸術工科大など）で減少し、現在に至る。一方、公立大をみると、2004年度から2009年度にかけての大学統合（東京都立大+東京都立科学技術大+東京都立保健科学大+東京都立短大⇒東京都立大など）で減少があったが、新設に加え、公立短大の4年制への転換で増加した。さらに私立大の公立化という設置者変更が相次いでいる。2009年度の高知工科大以降、2010年度：静岡文化芸術大・名桜大、2012年度：公立鳥取環境大、2014年度：長岡造形大、2016年度：福知山公立大、山陽小野田市立山口東京理科大、2017年度：長野大、2018年度：公立諏訪東京理科大、2019年度：公立千歳科学技術大が公立大としてスタート。現在も公立化を構想している私立大が各地にみられる。

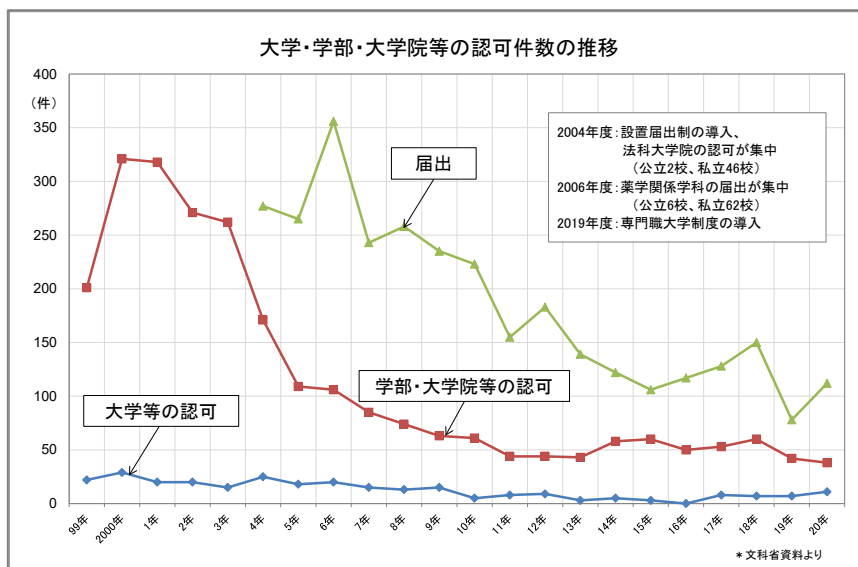
一方、短大は学生数ピーク時の1993年度でみると、学生数が53万人。これが2020年度は10万8千人と42万3千人も減少（79.7%減）した。学校数も1993年度の595校が2020年度は323校となり、272校の減少（45.7%減）だった。学校数の減少は、経営困難による廃止とともに、4年制大学への転換や併設大への学部化などが大きい。

* 国立の短大及び短大生数は2010年度に0となる。



◆医療系分野をメインに新增設が続く

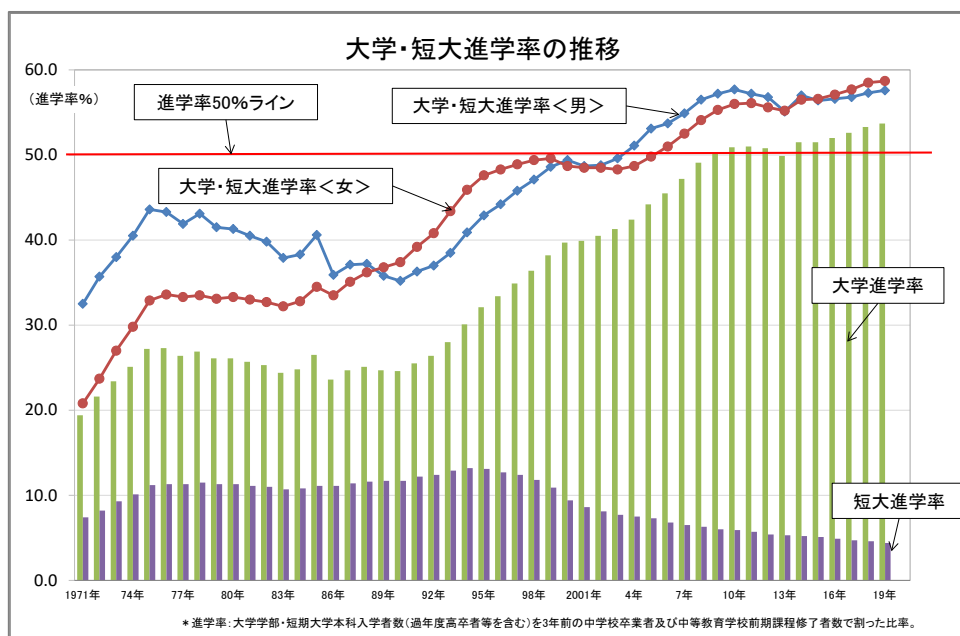
なお、大学数・短大数・学生数の増減の一要因である大学・学部・大学院等の設置認可の推移をみると、全体的には減少傾向にはあるものの、一定数の新增設・改組等が続いている。特に近年は医療・保健関連の学部・学科（看護、薬、作業療法、理学療法など）の増設が多い。東京都区内の入学定員管理の厳格化はあるが、他のエリアでの新增設に伴う定員増は続き、さらに受験生の地元志向も加わって入学者の拡大は続いている。



◆大学進学率は50%超で10年が経過

大学・短大の学生数の増減は、学校数の増減ばかりではなく大学・短大への進学率も大きな要因である。そのうち大学進学率は、1971年度の19.4%から1976年度の27.3%まで

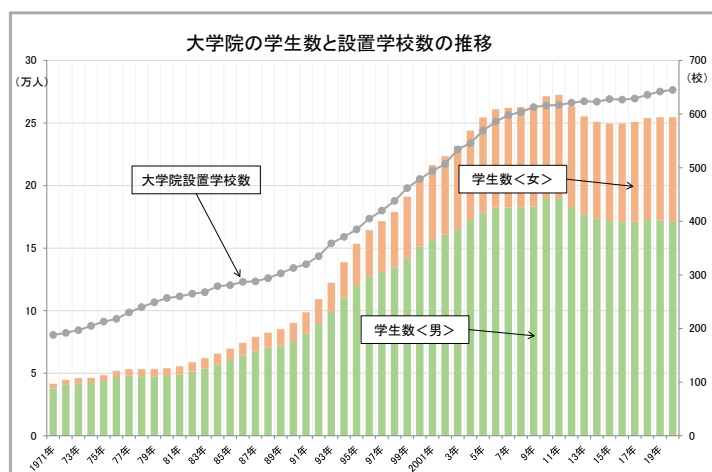
上昇したが、その後多少のアップダウンを経て1990年度の24.6%までは下降した。しかし、1991年度からは2012・13年度を除き、上昇を続け、2019年度は53.7%となった。この間2009年度には初めて50%を超えている（2013年度のみ49.9%）。一方、短大進学率は1994年度の13.2%のピーク時から25年間下降を続け、2019年度の4.4%まで下降を続けている。



また、大学・短大の「総合の進学率」は、男女とも1990年度前後から現在（2019年度）まで上昇を続けており、男子は2004年度、女子は2006年度に進学率50%を超えた。男女別では、1989年度から1999年度までの11年間および2013年度に女子は男子を上回った。さらに最近では2015年度以降、2019年度まで同じく女子が上回る傾向となっている。

*ここでの総合の進学率は、大学は学部、短大は本科における数値。

なお、大学院生数（ここでは大学生数の内数）は、設置される大学数の増加とともに伸びたが、2011年度のピーク時（27万3千人）から減少し、多少の増減はあるものの、2013年以降25万人前後で推移している。

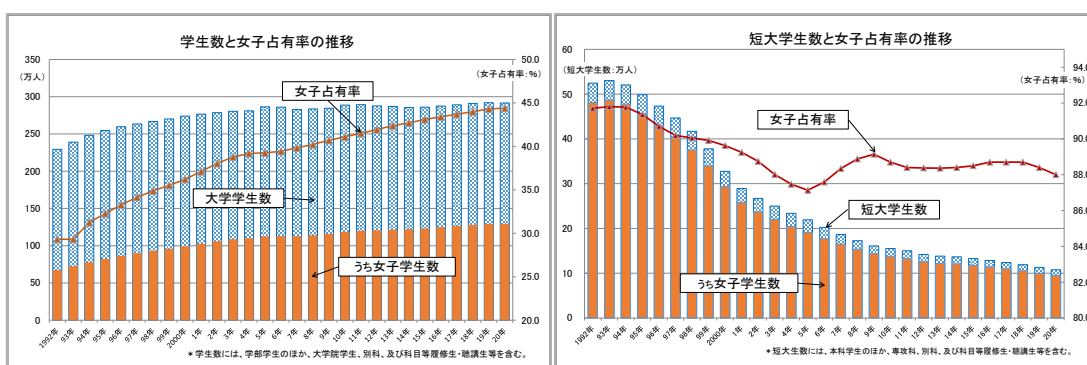


女子占有率の推移

◆大学の女子占有率は過去最高

2020年度の大学の女子学生数は前年度より1千人増え、129万4千人となり、その占める割合は44.4%（前年度より0.1ポイント上昇）となった。大学生の女子占有率は、1993年度は29.3%だったが、1994年度～2007年度が30%台、2008年度から40%台となり、2020年度は44.4%となった。

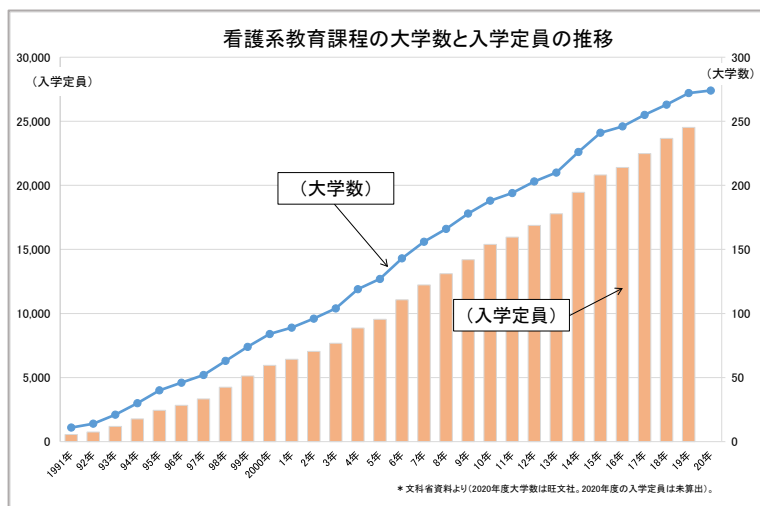
一方、短大の女子学生数は2020年度が9万5千人で前年より4千人減少した。1992年度に48万人台だったが、1998年度・1999年度が30万人台、2000年度～2004年度が20万人台、2005年度～2018年度が10万人台と減少し、2019年度は10万人割れ（99,866人）となった。なお女子占有率は88.0%で、9割近くが女子の状況はほぼ変わらない。



◆女子の活躍する分野・系統が拡大

大学・短大の女子学生の増減の推移をみると、短大の学校数減少（短大廃止、4年制への転換など）と4大志向による短大生の減少があり、そのことが大学生数の増加の一因となっている。

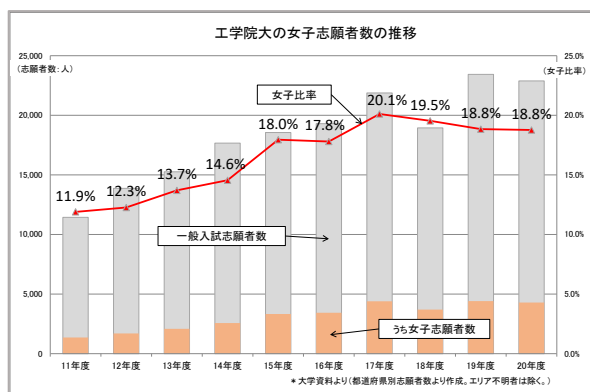
加えて看護学部や薬学部など、女子学生数が多い分野・系統の学部・学科の増加が大きい。例えば看護系教育課程を設置する大学は、2000年度84大学→2020年度274大学と3.2倍になり、入学定員も約6,000人が約25,000人と4.1倍になった。薬学部も2000年度46学部→2020年度77学部に、入学



定員も約8,200人が約13,000人と、各1.6倍の増加となった。

さらに、大学での男子学生数の伸び悩みの歯止めや、もともと女子学生数が少なかった理工系学部（特に工学系）の女子の獲得競争の影響が大きい。ここで工学系の女子拡大の

一例として、工学院大（東京）の過去10年間の一般入試での女子志願者の推移をみる。工学系人気から男女全体の志願者数も大きく増加しているが、その中での女子志願者比率は2011年度の約12%から2017年度には20%を超え、7～8ポイントもアップ。現在も20%近い割合を保っている。

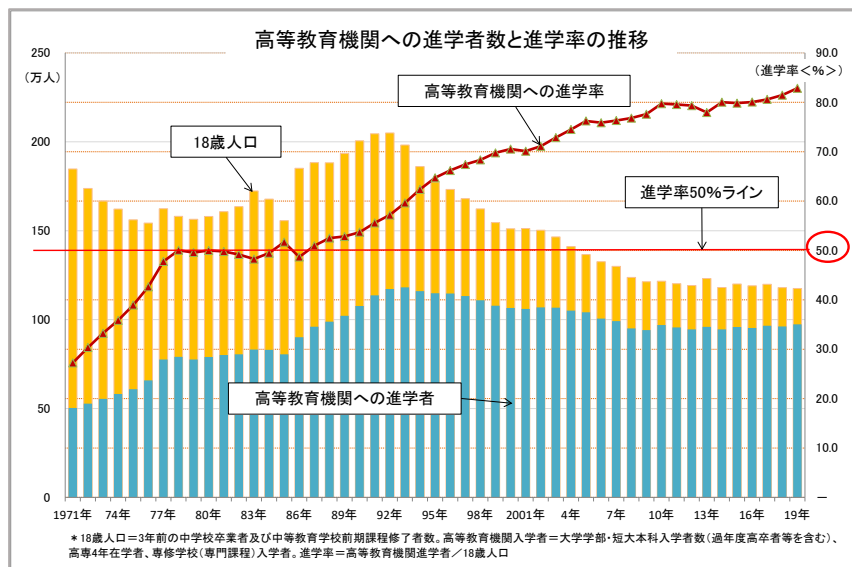


2020年はターニングポイントか

以上のように、これまでは大学（学部）は学生数の増加に支えられてきたが、今後18歳人口はさらに減少、社会人学生や留学生が増える状況は不透明である。さらに今年はコロナ禍による学校現場などでの混乱が生じ、また経済的困窮から一部の学生には退学も考える状況も生じているようだ。また前述のように新增設の大学・学部・学科はあるものの、

一方では統合や募集停止の大学、短大も出ており、入学者の減少傾向が恒常化しつつあり、大学・短大の生き残り競争は熾烈を極めている。

これまで入学者増加の波に乗ってきた大学をはじめ高等教育機関（大学・短大・専門学



校・高専など）への進学率（1971年度27.2%→2019年度82.8%）も、各種の奨学金制度の導入などの施策が講じられてはいるが、今後は減少に転じる可能性もある。そうした意味では、2020年は、大学はもちろん、高校生にとっても様々な進路の選択肢を見つめなおすターニングポイントなる年である。

(2020.11 常盤)